

日本百観音霊場巡礼成満

八王子市 岡 光子

去る平成二十八年三月十四日〜十六日に、秩父三十四観音霊場巡礼が行われた。この巡礼により、以前に行われた西国三十三観音霊場巡礼、坂東三十三観音霊場巡礼と合わせて、日本百観音霊場巡礼の成満を果たすことが出来た。

今回の巡礼には、高尾山より先達の堀江承豊師を始めとして、原秀誠師、落合義俊師、鈴木乘然師が同行された。

日本百観音巡礼を目指して、西国三十三ヶ寺、坂東三十三ヶ寺を巡る道中は、好天の日ばかりではなかった。思いもよらず大風雨に見舞われ、びしょ濡れでの巡拝を情けなく思ったこともあった。その時はいつも堀江師が「晴雨に関わらず喜んでお参りしましょう。雨

の日のお参りは、その分だけお蔭も大きいかもしれない」とおっしゃって、大きな雨合羽に法螺貝と法具を持ち、私達信徒を丁寧に導いて下さった。

この度の、巡拝第一日は雨となり、バスが動き出すと、すぐに参拝するお寺の御詠歌をお唱えすることに。ありがたや、ありがたや。

法のはな 一卷ならぬ 数は四萬部の たらぬにいしえ

第一番札所の四萬部寺の入母屋造りの本堂の妻飾りは、美しい草創期の面影を残していた。堂内には、四十六・四センチの御本尊・聖観世音が奉安されているが、この日は御開帳ではないので、直接拝観は出来なかった。近頃秩父の札所は、十

二年ごとの午歳に御開帳が行われている。それは、午が観世音の眷属であるためと、観世音は南方補陀落におられ、午の方角が南方にあたることによるという。

この札所は性空上人の弟子である、幻通が聖武天皇の遺命により、この地を訪れ、四万部の仏典を供養のために読誦し、経塚を築いたという。

これが四萬部寺の草創である。本堂の右手には八角輪蔵が納められた施食殿がある。中央に地藏尊が安置されており、周囲には施餓鬼供養者の戒名が刻まれている。毎年八月二十四日には、大施餓鬼会が催され、大変な賑わいだという。この寺は古くから関東の三大施餓鬼会に数えられているだけに、昔は三十俵の米を炊き、信者はもとより多くの飢餓者にも平等に施しをした時もあったという。

生きとし生ける飢餓に苦しめられていたものに、



圓福禅寺御住職と一緒に記念撮影をする一行

飲食の施しをするという施餓鬼会の精神が、今なおこの寺には生きつづけているのだろう。

第二番の大棚山真福寺は、高篠山の中腹の明るい斜面に観音堂がある。ここは秩父札所が三十四ヶ寺になった時、増置された札所で、万延元年の焼失前には十三賢者像もあったという。今ある観音堂は明治四十一年に再建され、観音堂建立にはこんな説話も残されている。

武甲山を中心にして、東西南北を巡るように札所が配置されている。白い荒川の清流を下に見て、ここからは山間の谷川に沿った林道を下ると、万鉢地藏が山の斜面に奉られ、近年建立の水子地藏で知られる地藏寺があった。ここから七百メートルあまり進むと林道は行き止まりになって、右手には第三十一番札所の、鷲窟山・観音院の仁王門がある。この門には、観音院の裏山から掘り出された石材で明治元年に造られたという、仁王像が安置されていた。この仁王像は信州伊那谷の人藤森吉弥の丸彫り一本石の石造と書かれていた。

像高三、〇八メートル、二段の台座を加えると約四メートル、石像として他にあまり例を見ない日本一の仁王像であるという。見上げると仁王像の頭の辺りから急な石段が始まっていて、赤く塗った金剛杖が「どうぞ」と言わんばかりに立て掛

率よく巡拝することが出来た。ところが、第二十四番札所の法泉寺まで来ると、武甲の山容はセメントの採掘で削られて荒々しい跡が残り、白く輝いて近寄りたいたい霊山に見えてきた。道端には二基の自然石の石標があり、ここが法泉寺の入り口で、一直線に伸びた百十六段の急な階段が本堂へと続いている。石段は数限りない巡礼の踏み固めた重みと、長い歳月で所々擦り減って崩れかかっていた。

もの大数珠を、輪になって念仏を唱えつつ廻す、「廻り念仏」が行われると書かれていた。足の悪い私が階段を断念していると、若い鈴木師が輪袈裟を持ってお参りして下さいというので、有難くお願いをして、階段の下で待つことにした。すると、ふっと現れた作務衣姿の寺男が話しかけてくれた。

「みなさんは飯縄大権現の笈摺を背負われた、高尾山の方たちですね」「はい、そうです。みんな巡礼に来ましたが、私は足が悪いので、ここで待っていることにしました」と言うので、作業の手を休めて「これからこの札所は花の寺になって綺麗ですよ。お参り御苦労様です」といって落ち葉を掃いている。

また毎年四月十八日の縁日には、約十メートルの

その上、急な巡礼道を歩けば奥の院になる。早春のこの時期、「熊も出没する」と書かれていた。巡礼の仲間たちはこれを読まずに駆け上ってしまいました。私は辺りを歩いた。そう、かつて読んだ本の中に、こんなことが掛かれていたのを思い出した。それは、仏教の初期の教説に「大般若経」六百巻があり、これは漢訳で漢字六十四億四千万字で綴られる、大変難解な経典なのだそう。これを分かりやすく説かれたのが二百七十六文字の「般若心経」だという。「般若心経」はお唱えするだけでも心に入ってくるというが、その要点は大変難しく分りにくい。般若心経「はいきなり「観自在菩薩 行深般若波羅蜜多時」と出てくるが、これも難しい。この世の全ては「空」の一字に帰すと云うのも難しい。「形ある物はいずれこれわれる」、

今回の巡礼で百観音霊場巡拝を成満した筆者御夫妻

秩父札所は